

展示シリーズ12 クジラつり（マッコウクジラの骨格）

おおしまみつはる  
大島光春（学芸員）

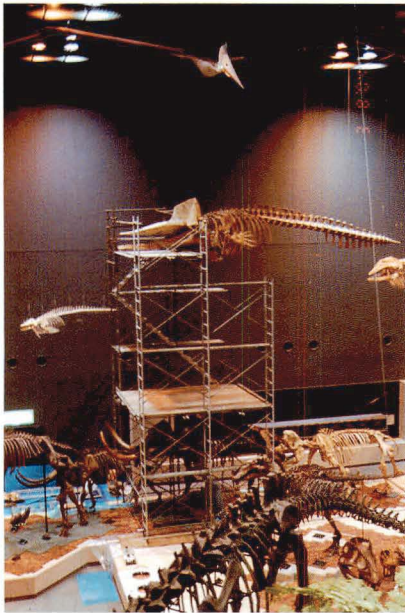


図1 生命展示室内に組まれた足場。5層に組まれた足場の上は、かなり揺れる。

きっと皆さんはご覧になったことはないと思いますが、博物館では定期的に展示のメンテナンス（保守）を行っています。これらの作業はとでもたくさんの項目・箇所をわたって行われており、数ページで紹介できる内容ではありません。今回は吊り物の中でもっとも大きなマッコウクジラのステンレス製ワイヤロープ（以下ワイヤ）を交換したので、その作業の様子を中心に紹介します。

長さが10mを超え、重さが300kgを超える骨格標本が、地上10mの高さに、4mmのワイヤ13本で10年近く吊されています（このクジラがどのようにしてここへ来たのかについては「自然科学のとびら」6巻3号20ページと同7巻2号13ページを参照してください）。ご存じでしょうがワイヤは徐々に伸びて細くなり、やがて切れます。一度にすべてのワイヤを替えたいところですが、十分な



図2 足場の上でクジラの頭骨を前に作業の手順を確認する。

予算がありません。そこで最小限の費用で最大限の安全を得るために、もっとも大きな力がかかっているクジラの頭部を吊っているワイヤを交換することにしました（図1）。さらに、今までは直径4mmのワイヤを使っていましたが、安全マージンを大きく取るために直径9mmのワイヤを使うことにしました。ワイヤの断面積が約5倍になったので安心です。よ〜く気をつけてみると胴や尾を吊しているワイヤより頭を吊しているワイヤの方が太いことがわかるかもしれません。

作業はまず、足場を組み、骨の状態を確認します（図2）。次にキャットウォーク（天井裏の通路）から新しいワイヤを降ろし、頭骨の吊り元につなぎます（図3）。新しいワイヤを引き上げ、ワイヤにかかる力が以前と同じくらいになるように調整します。頭についている3本のワイヤ全部をつないだ後、3本のワイヤにかかる力が均等になるように調整し、古いワイヤはずします。その後、一部破損していた胸椎を修復して、最後に足場をはずして終了です。こうして、文章にすると実に当たり前の作業なのですが、現場は結構大変でした。写真から察してください。



図3 キャットウォークでワイヤの調節・固定作業を行う篤の皆さん（左）と標本側吊具（右）。右の写真で右側の太いのが直径9mmの新しいワイヤ、左側の細いのが直径4mmの古いワイヤ。

ワイヤの伸びは、コームパッシア・エクセルサ（以下板根）でも、問題です（図4）。この木は放っておくと西（図4では左）に傾き、根が東側（同右）のオレンジ色の壁（裏には翼竜プレラドンがある）に接触してしまいます。ワイヤにゆりみがないか確認し、丸棒の長さを調整して、なるべく直立に近い状態を保ちます（図5）。

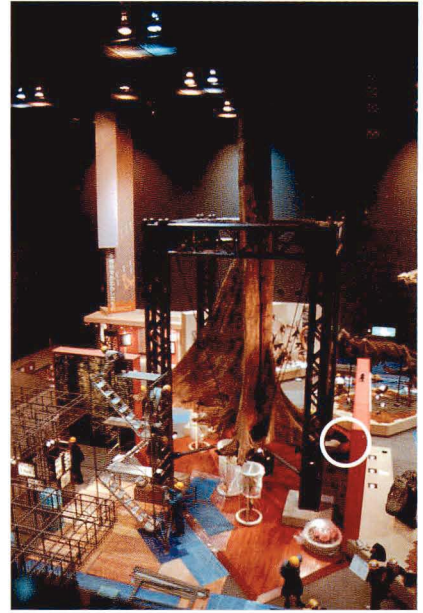


図4 板根にも足場を組み。○部分で根の先が壁に接触しそうなのがわかる。



図5 板根の上部を支える部分。

足場を組むことや高所での作業は、鷹職の仕事です。危なげのない、要領の良い作業ぶりにはプロフェッショナルを感じます。私たち学芸員は標本の状態を確認し、その状況に応じて作業の方針を決めたり、作業の仕上がりを確認したりします。標本の保全と安全の確保にはこうしたメンテナンスが欠かせません。今後も博物館の裏方で行われている活動について紹介していきます。

自然科学のとびら

第10巻2号（通巻37号）

2004年6月15日発行

発行 神奈川県立生命の星・地球博物館

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/museum/g.html>

e-mail: [plan@nh.kanagawa-museum.jp](mailto:plan@nh.kanagawa-museum.jp)

発行人 青木淳一

編集 大島光春

印刷所 文化堂印刷株式会社

自然環境保護のため、再生紙を使用しています。